

月刊 やちまなこ

2015.6.15 発行

No. 211

6 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



湿原散歩

湿原や丘陵地の林は鮮やかな緑が広がり、天気の良い日にはエゾハルゼミの鳴き声が波音のように聞こえ、北国に初夏の訪れを告げているようだ。色とりどりの花が咲き始めた湿原では、子育てに忙しい親鳥が虫などをくわえながら飛び交う。短い夏に向け、すべての生きものたちの活気に満ちた季節を迎えた。

コッタロ川と湿原のほとりから

180 6月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住・中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

大地の躍動が一気に高まり、爆発した緑の繁茂で、人の背丈をはるかに越す水辺のコゴミ（草ソテツ）やフキ、ワラビ等、草と共に伸び放題の我家は草刈り地獄の始まりです。一方、林下に自生するスズランが地下茎を張り巡らせて年々増殖し、そこいら中を埋め尽すように白い可れんな花を付けており“円やかな青葉の雫受けて咲く君影草の馨しき哉” 加えて庭先にはセンダイハギの黄、桜草のピンクが色鮮やかに咲き誇り、薫風に波打つ様はこの月ならではの風物詩と云えましょう。

ところで、3月のどんでん返しでみが入替った丹頂の第1コツ&タロの新カップルに奇跡とも思える2つのヒナが誕生し、元気はつらつ走り廻っているのを見るにつけ、野生（自然）のしたたかさ、不思議さ、面白さを実感せずにはいられませんね。さらに驚かされるのは、あれほど人間を恐れビクビクし乍ら遠ざかっていた新子が、父親となつてからは俄然逞しく、大胆にふるまうようになり、その変身ぶりは「もう何十年のお付き合いか」と、勘違いしそうな雰囲気をもしていることです。尤も早にしてみれば23, 24羽目を数えるこのヒナ達も新子にとっては初ヒナ（1, 2羽目）であり、恐らく人間で云うところの“目に入れても痛くない”可愛さなのでしょうよ。

又、庭のアイドルとして昨年9月からすみ付いているエゾシマリス♂♀は、丹頂のヒナが日毎に足や首を伸ばして行くのに対し、いつ迄も小さく、仕草の愛らしさが人々を惹きつけ、やれ“毛づくろいだ”“牙と爪研ぎだ”と云いつつ、見飽きないでいるうち、日向ぼっこ中にうとうとして木積みから転げ落ちそうになってヒヤリとさせられたり、見る者の目尻は下がりっぱなし。貯食をしないこの時季でもエサを土中に埋める彼等の習性は変わらず、前足で上からていねいに押さえる入念さには思わず吹き出しそう。ベビーシマリスの誕生を今か今かと待ちわびる毎日です。

さて、特筆すべきは、久方ぶりにアリスイとノゴマ♂の渡来で、地味色のアリスイのシックな装いに対して、まっ赤なノドから発せられるコロラチュラソプラノがもち味のノゴマ♂はソプラニスト中No.1.で涼やかな歌声は一度聴けば忘れられません。窓越しにプープク膨らませ悦に入った歌いっぷりをパチリ！ “ノゴマ鳴く朱色のノドでノド自慢”の様子が見てとれましょう？

このところ、昼夜を問わず鳴き続けるカッコウとカエルの合唱第二弾との競演に、日中はエゾ春蟬のけたたましい“ミ～ヨ～シ～”の大合奏が、怒濤となって押し寄せるのを「喧しい!!」などと云うのは罰当たりでしょうかねえ。



湿原の住人たち その171

ビンズイ

今年も繁殖のためにビンズイが釧路湿原にやってきました。見かける機会の多いハクセキレイと同じセキレイの仲間なので、尾羽を上下によく振ります。英名で Olive-backed Pipit というように、体の上面がオリーブ緑色をしています。草むらにいと保護色になって目立ちませんが、木にとまってヒバリに似た声でさえざることから、キヒバリの異名もあります。文字で表すのは難しい複雑な歌の最後にゾーと濁った声が入ります。ビンズイがいそうな明るい林で鳥の声に耳を傾ければ、名前の語源になった「ビンビンツイツイ」というさえざりが聞けるかもしれません。



耳で楽しむバードウォッチング・・・シラルトロ湖・蝶の森周辺

6月13日にタンチョウコミュニティ音成邦仁さんの案内で「新緑の湿原バードウォッチング」を開催しました。上空を厚い雲が覆い時々小雨の降る中での観察会となりました。木々の葉が茂り鳥の姿を見つけるのが難しい時季ですが、さえざりは賑やかで、講師から教わった「鳥がいると思って耳を澄まし、声を頼りに肉眼で探してから双眼鏡で確認すること」を繰り返した結果、参加者15人の協力で声だけの確認も含め25種類の野鳥を観察。空模様のおかげか、上空を飛び交うショウドウツバメ、ハリオアマツバメ、アマツバメの3種類の姿や形を比較しながら観察できました。



つぼちの塘路湖周辺うろうろ日記 Vol.80 「郷土館開館から45年目。たまには宣伝！」

塘路湖周辺でも、初夏への雰囲気を感じられるようになりました。昨年度完成した遊歩道の他、芝生広場そして各種施設が揃い、ここ元村地区ではゆったりと自然と歴史を楽しみ学ぶ事ができます。こうした環境作りは、昭和36年塘路湖シラルトロ沼を中心に標茶町立自然公園として指定し、元村地区を「青少年の村」とした時から始まりました。この時に標茶町郷土館が設置されました。その後町立自然公園は、昭和62年に誕生した釧路湿原国立公園の一部となり発展的指定解除となりますが、元村地区の整備は以降も続き平成9年に塘路湖エコミュージアムセンターがオープンします。郷土館の設置は現在レクリエーション空間として利用されている元村地区の方針を決定づけた施設でした。

そんな郷土館も今年30日で開館から満45年目を迎えます。散策のついでにどうぞお立ち寄り下さい。

坪岡 始（標茶町郷土館学芸員）



